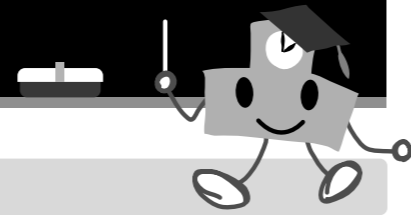


### 小学校の事例 西区 発寒小学校

# 地域商店街の環境イベントに参加。 エコへの意識が高まり、日々の行動が変化。

イベントをきっかけに、  
自発的なペットボトルキャップ回収を継続していくことに。  
1つの活動から日常的な取組みへ発展し、  
環境意識が高まっている。



## 内容 短期間に集中して回収を実施

本校では平成22年、地域の商店街が行った環境イベントに協力する形で、ペットボトルキャップ回収を行った。6月の地球環境デーから7月のクールアースデーまでの期間に実施。

学校では職員室前に回収ボックスを置き、家庭へ向けのお便りで協力を呼びかけた。

商店街では、同じく回収ボックスを設置したほか、この商店街のみで利用できる独自の通貨「アトム通貨」（10馬力=10円）を用意し、ペットボトルキャップを持参した子どもには個数に関わらず10馬力（10馬力=10円）がもらえるという工夫がされた。

商店街からの呼びかけがあつてからの活動は、実質2〜3週間で、けっして長い期間ではなかったが、最終的には商店街、学校それぞれの回収個数を合わせて、約7万個（ワクチン約89人分）という成果があつた。



回収したペットボトルキャップ

## 効果 イベントをきっかけに 日常的にエコを意識

ペットボトルキャップが「人を助けるワクチンになる」ことを知った子供たちは、通貨キャンペーン終了後も「人を助けよう」という純粋な気持ちで日々ペットボトルキャップを学校にもってくるようになっていく。そして、少しずつエコを意識するようになったようだ。特に電気・水・紙類などを、「必要な量のみ使う」という日々の節約の気持ちや心がけが身に付いてきている。

イベント後、ペットボトルキャップ回収の大々的な呼びかけは行っていないが、児童が今も学校に持参する動きが続いており、次年のイベントに向けて、児童の気持ちを大切に担任が預かることにしている。



エコを意識した掲示物

## 今後 地域性にあつた環境教育を 身近なところから

本格的に取り組む場合には、ペットボトルキャップを保管する場所について、火気などの安全面で注意が必要である。また、意外と回収業者が少なかったり、かなりの量を集めなければ回収に来てもらえなかったりなどの理由で、継続して取組んでいくには、置き場が問題になるだろう。本校では、預かったペットボトルキャップを、空き教室で保管している。

環境に関わる活動を長続きさせるには、無理をせず、できることを少しずつ毎日やるのが大切であると考えている。環境教育に関わる活動には様々なものがあるが、それら全てを学校で取組もうとすると、限られた授業数の中では「環境」について学ぶ時間が十分には取れず、「思い描いている青写真にはまだまだ…」ともどかしく感じられる部分もある。しかし、一番大切なことは、地域性と学校の実態に合った活動をする中で、子供たちに「自分たちの未来のため」ということをうまく伝え、教えていくことなのではないかと考えている。



校内の花壇

広げよう  
つなげよう  
環境学習の輪

実施校から  
メッセージ

全校で年3回、空いた時間（放課後など）を利用して、花の種を植えたプランターを、校内の花壇と校舎周り、そして新道沿いに置いています。これは校区内の交通安全を願う気持ちや思いやりの面だけでなく、温暖化防止に向けての環境意識を育てるために、続けている活動でもあります。緑化を絶やさず続けるのはなかなか難しいことですが、地域性を生かし、また環境局・教育委員会作成の副教材や手引なども活用しながら、生命について意識して進めることが大切だと考えています。